

「土着思想」、「執拗低音」としての日本資本主義における土地所有

——戦後日本資本主義分析の方法耕運のために——

涌井秀行

I. はじめに

「もしも私が家を建てたなら / 小さな家を建てたでしょう / 大きな窓と小さなドアと / 部屋には古い暖炉があるのよ・・・ブルーのじゅうたん敷きつめて / 楽しく笑って暮すのよ / 家の外では坊やが遊び・・・そして私はレースを編むのよ / わたしの横には・・・あなたが居て欲しい」⁽¹⁾

すでに去った恋人との新婚生活を夢見る女性の思いを歌ったこの曲は、1973年に発表され、歌詞に歌われた暖炉のある白壁の家は幸せな新婚生活の象徴のように言われ、レコードは160万枚を超えるミリオンセラーとなった。1960年代初頭「男にとってはいわば『一億総サラリーマン化』が完成し、女にとっては『サラリーマンの妻』＝『奥さん』に成り上がる夢」⁽²⁾が出来あがった。その夢は1970年代初頭には見るものから、つかみ得るものになった。それが冒頭の小坂明子「あなた」である。しかしそれから30年後、厳しい現実がその夢を打ち砕いていく。

「職場の同僚が里帰りするたびに、老父が『お前を50過ぎまで働かせて、家1軒建てられないとは、ふがいない亭主だ。男は家を持って一人前なのに、一生、アパート住まいで女房を工場勤めさせるとは哀れな話だ』と嘆くという。このため同僚の夫は妻の里には絶対、行かないそうだ。他のマイホームを建てた人も食べる物、着る物の出費にも神経をとがらせ、金銭をめぐる夫婦、親子げんかの毎日『こんなことなら、無理せず、賃貸に住んでるんだっただ』のローン地獄の真っただ中

という。知人の夫は借地だった土地を地主が売ってくれる幸運に飛びついて、鎌倉の一等地を退職金、全貯蓄をはたいて購入したが、定年の翌年、61歳で亡くなった。地主の座について、1年にもならないうちの急死だった」⁽³⁾。朝日新聞投書欄の「多大なローンに悲喜こもごも 戦後50年・土地神話」と題されたパート主婦の「声」である。その多大なるローンには生命保険がかけられ、借主が死亡して返せない場合には保険金があてられる。文字どおりの「ローン地獄」である。

一方で、企業・資本の大土地所有は、土地を「錬金術」の「タネ」としてきた。「富士製鉄の1965年3月期決算で所有地は570万坪で坪当たり単価567円、貸借対照表上の簿価は33億円であった。ところが所有地時価は780億円にのぼり、差し引き748億円が『含み益』になっていた。この期の富士製鉄の資本金は820億円であったから、富士製鉄は資本金に匹敵する『含み益』」⁽⁴⁾を、地価上昇によって得たのである。それから25年後平成バブル崩壊寸前の1990年には、継続した地価上昇は次のようなマジックも生み出した。無配を続けていた石川島播磨重工業の株価の上昇は「首都圏などに持つ744万平方メートルの土地の含み益が大きいというのが、・・・理由だった。石播は、この株価上昇を踏まえて、・・・社債、ワラント債を5億ドル発行。これで調達した資金を研究開発や豊洲のビル建設に投じることができた。豊洲近くの土地は、時価の7割とされる公示価格でも1平方メートル当たり200万円前後。昭和初期に購入した『今と比べたら、ただ同然』の安い土地が、巨額の資産に化けたのだ」⁽⁵⁾。

先ほどのパート主婦の投書は次のように続いている。「もし、その人が親から土地を相続出来た、跡取り息子だったら、土地代金が寿命を縮めるような人生を持たなくて済んだと思う。生まれながらの地主は土地の高騰で暴利のそのまた暴利をつかみ、相続の幸運のない者は多大な借金で土地を買い、生涯、ローンの奴隷となる、経済格差の悪循環に怒りを覚える」と。

この事情を日本と同じ第2次世界大戦の敗戦国でありながら高成長＝「ラインの奇跡」をなし遂げた(西)ドイツと比べてみよう。1986年の話であるがまず借家の場合。「ミュンヘンで会ったタクシー運転手ペーター・ベルテシさん(26)はハンガリー人。19歳の時、1人で出稼ぎに来た。『4年前から、34平方メートルの単身者アパートに住んでいて、家賃は月550マルク(1マルク=75円換算で4万1000円強)』・・・それが市中心部から地下鉄で20分でいける。1972年のミュンヘン・オリンピック用に選手村として建てた高層ビルを住宅にしたモダンな団地だ。副収入も入れると月収は2500マルク(19万円弱)」。次に持ち家の場合。「西独一の総合電機メーカー、シーメンス社の広報部次長ホルスト・ジーバートさん(47)も同じ団地だが、こちらは分譲式。108平方メートルで、10年前に20万マルク(当時の1マルク=120円換算で2400万円)で買った。『妻と大学生の息子の3人なので十分な広さです。住宅ローンは今年で返済完了ですが、公的資金も入れると年利4%だし、月収が1万マルク(75万円)だから楽でした。いま売れば30万マルク(2250万円)はします』西独の住宅面積は1人当たり平均34平方メートル。ベルテシさんも、3人家族のジーバートさんも、ほぼ平均だ」⁽⁶⁾。これが西ドイツの住宅事情である。

土地所有権に関しては所有者の強い権利が認められているドイツではあるが、用途や建築基準において厳しい規制がしかれている。例えば用途ではフランクフルト市の場合、市内の面積の55%は公園、森林、農地などの緑地、15%が住宅地、事務所などの就業地、道路、鉄道、空港などの交通用地が15%の割合となっている。また、借家にも

手厚い補助がおこなわれている。借家が全住宅の6割、都市部にあつては8割前後を占めるドイツでは、建主に対する建設費の低利融資、減価償却の優遇策に加え、居住者には所得と家族規模に応じた住宅手当で、一定の居住水準を維持できる仕組みが整えられている。

いま述べた住宅に関する悲喜劇には土地所有がついてまわるが、土地はそもそも人間労働の生産物・果実ではなく、従って本来的な価値を持たない。だが、有限的な土地が私的に占有・所有されることによって地代という不労所得範疇が成立する。封建制の解体は、農民を土地に武力で縛り付けるという土地所有(領主)の絶対性をつき崩し、地代が資本主義システムに照応するように変態していく過程でもあった。封建的土地所有者である領主の経済外的強制(武力等)によって農民・農奴の生計費に食い込むほどの地代は、資本の生み出す利益(剰余価値)の一部から土地所有者に支払われる資本主義的地代に変化していった。商品生産の支配が進むにつれて、土地所有自体の経済的価値の自立化・商品化が生じ、資本制地代・土地価格が成立したのである。だが、そのプロセス、その根幹である土地所有の優劣は各国の歴史的事情によって大いに異なった。ヨーロッパでは英仏のようにピューリタン革命やフランス革命によって封建的土地所有が解体し、土地所有の優位性が消滅していった国々もあれば、ドイツのように封建的な関係が色濃く残存した国々もある。しかしそのドイツでさえ近代以降はユンカー支配の下でも資本主義的経営へ移行し、土地所有の絶対性は空洞化していった。戦後は西ドイツでも土地所有は厳しい規制下におかれることになる。

「土地所有者たるの資格の圧倒的に優位」⁽⁷⁾な性格とは、「半封建的土地所有」を規定して、山田盛太郎が述べたものである。戦後の農地解放によって消滅したかに見える「土地所有者たるの資格の圧倒的に優位」な性格は、戦後には本当に消滅したのだろうか。先ほど投書の「土地代金が寿命を縮めるような人生」を送らなければならなかったサラリーマンの「マイホーム」残酷物語はその「優位性」の対極にある話なのではなからう

か。それはちょうど、破傷風でのたうちまわって死んでいった、長塚節「土」の女主人公・お品のような小作人の「悲惨な暮らし」の戦後物語ではないのだろうか。日本において土地所有は古代以来「土地所有者たるの資格の圧倒的に優位」のもとにあり、それぞれの時代の社会の基層となって社会の仕組みを造形してきたのではないか。そして近代以降も決定的意義をもち続け、戦後でも社会を染めあげモディファイする「因子」だったのではないのか。

丸山真男は、日本精神史における「個性性」を「外来文化の圧倒的な影響」を受けつつも「執拗に残存」する日本的な得体の知れないものを論及し続けた思想家である。丸山はその得体の知れないもの、つまり外来のものを受容し日本的なものにモディファイしてしまういわば定型処理ソフトを、「古層」あるいは「執拗低音（バッソ・オスティナート）」⁽⁸⁾とよんだ。こうした考え方はひとり丸山だけのものではない。加藤周一は言う。「超越的な価値を含まぬ世界観は、排他的でない。故に新を探るのに、旧を廃する必要もない。しかも、新思潮が外部から輸入された場合には、内発的変化の場合と異り、土着の世界観の持続性がそのために害われるおそれは少なかったはずである」⁽⁹⁾と。日本では文化領域で新しいものが受容される場合、新旧の交替にならず古いものに新しいものが加えられるという発展パターンが歴史的に繰り返された、というわけである。冒頭エピソードで述べた悲喜劇は土地所有にまつわるものであるが、「土地所有」とりわけ日本独特な「零細土地所有」は戦前戦後を通して、日本資本主義を染め上げた「執拗低音（バッソ・オスティナート）」あるいは「土着世界観」ともいうべきものではないのか。こう直結しなくとも、少なくとも丸山が述べ加藤が言うことを、戦後日本資本主義分析をする際の視角として、経済分析にも繰り返すことはできないだろうか。

筆者は「アジア類型の原型として戦後日本資本主義をとらえるための吟味分析」⁽¹⁰⁾をおこない、「零細土地所有」を東アジア資本主義に通底する基本構成・蓄積メカニズムの核として措いてきた。

問題を東アジアへと展開する前に一度立ち止まり、近代以降の日本資本主義に通底する「執拗低音」あるいは「土着世界観」として「零細土地所有」を措定できるのではないか。戦後においても「零細土地所有」がその意味をもち続けているのではないか。筆者はこのように考えた。小稿は、その闡明のための方法を加藤周一、丸山真男から学び、戦後日本資本主義分析の視角＝方法を彫琢する際の栄養素にしてみようとする論考である。これが小稿の課題である。

Ⅱ. 山田盛太郎の「時代画期」と丸山真男「執拗低音」と加藤周一「土着思想」

1. 山田盛太郎の土地所有の画期と時期区分（政治的変革）

山田盛太郎は、1945年の敗戦を境に戦後日本の民主革命の基礎過程を分析するために、日本歴史における土地制度の総括をおこなった。「およそ歴史の劃期たる政治的一大変革の基礎となりうるころのものは、土地所有の変革であるが、いまこれを日本の歴史についていえば、それは大体、次の四にわけうるであろう」⁽¹¹⁾。歴史的劃期たる政治的一大変革の基礎となりうるそれぞれの劃期については、図1に示したとおりである。こうした認識は加藤周一や丸山真男にも見られる。まずこの土地所有と歴史的劃期の関係について山田の見解を参照しつつ加藤の時期区分を確認しておこう。

2. 加藤周一の土地所有・時期（政治的変革）区分、そして「土着思想」

加藤周一は **1** の時期を政治的には、「天皇家が他の有力な貴族に対して、・・・次第に権力を独占してゆく過程であった。・・・（身分制度としては）貴族支配層、原則として頭割り平等の耕地を得た（『班田制』）『良民』、最下級の奴隷（『家人』、『奴婢』）。『公民』または『良民』は、生涯に一定の耕地を得たが、死後その土地を政府に還すので封建的な意味での土地私有制はなかった。・・・律令制の領民には、国家権力に対して、まったく政治的な権利がなく、納税と労働力提供の義務だ

図1 土地所有の画期と時期区分⁽¹²⁾

- 1 班田法 (652 白雉 3 年—742 天平 14 年)
戸籍 【大化の改新】 645 年 → [I] 奈良平安朝時代 (710 年—794 年)
班田法 (西暦 652—742 年) にあらわれた氏族制から房戸, 戸へ分解する広汎な過程を基礎とする奈良平安朝時代 (710—794 年)。
- 2 荘園 (私墾田開発令; 三世一身の法 723 養老 7 年)
藤原・平・源【承久の乱】 (1221 年) → [II] 鎌倉封建制文治元年兵糧米反 5 升
1186 文治 2 年兵糧米停止
徭役 労働地代
荘園制 (723 養老 7 年の私墾田開発令を起点とする) における土豪〔地方豪族〕割拠的領有を基礎とする鎌倉幕府時代 (1186 年—), 換言すれば鎌倉封建制の時期。すなわち, 労働地代が一構成要素となっている時期。
- 3 太閤検地 (1582 天正 10 年—98 慶長 3 年文禄検地)
信長・秀吉・家康【応仁の乱】 (1467 年—)
地方豪族の領有的割拠の解体再編 → [III] 徳川封建制 (1603 慶長 8 年)
(荘園制の最終的終息) 年貢 生産物地代
太閤検地 (1582 天正 10 年起点) を基準とする豪族割拠の広汎な解体とその全国的規模における再編とに由来する徳川幕府時代 (1603 年—), 換言すれば徳川封建制の時期。すなわち, 労働地代は残存するが一般的には生産物地代が支配的な時期。
- 4 地租改正 (1873 明治 6 年)
【明治維新】 1868 年 → [IV] 半封建的土地所有制
= 半隷農的零細農耕
地租金納 = 現物小作料
地租改正における幕府ならびに藩の領有の廃止とその旧領有との直接的結合においてヒエラルヒッシュの形で生成した所有ならびに保有の確認基準の一大再編を基礎とする日本資本主義時代, 換言すれば半封建的土地所有制 = 半隷農的零細農耕が日本農業の基本形を形づくる時期。すなわち, 「現物年貢」と地租金納と分化する時期。
- 5 農地改革 (1946 年第 2 次)
【敗戦】 1945 年 → [V] 零細土地所有 = 零細農耕
固定資産税

け」⁽¹³⁾ が課せられた時代である, とした。

だが, この時代も解体の種を内包していた。「平安遷都 (794 年) から・・・およそ 100 年間に「最初の転換期」が開始する。これは図 1 では 2 の時期にあたるが, 「律令制の権力構造が・・・著しく『日本化』され・・・経済的には, 土地の私有化による律令制の破壊が・・・はじまった」⁽¹⁴⁾。この事態は, 平安から鎌倉への時代転換を意味するだけでなく, その後の日本歴史にとって決定的な意味を持つ, 自作農の層と王室・貴族・寺院の大土地私有 = 地主権力が中央および地方に生ま

れ, これが「その後どれほどながく残ったかは, いまさらいうまでもない」⁽¹⁵⁾。だがこの時期は「再転換期」を内包していた。源頼朝・鎌倉新政権は既存の貴族支配体制の外に, 武士のクーデターによって軍事独裁政権をつくった。新政権はクーデターに参加し支持した新秩序 = 在地領主層 (「御家人」) の土地私有権を認めながら, 律令制荘園を経済的基盤とする旧秩序 = 天皇・貴族 (京都にいる不在地主) の土地私有権も認めなければならなかった。しかも新政権自身も平氏から没収した荘園を主な経済的基盤としていたから, 必然

的に新旧の二重性をもたざるを得ず、このバランスの上に立つ不安定性を内包していた。しかし、13世紀における在地領主層の主導する農業生産力の上昇（灌漑の発達、二毛作の普及、畑作農産物の多様化など）は、この勢力バランスを崩し、在地領主＝武士層の優位性は確立（「再転換期」）し、封建制へと時代は移っていった。

加藤は [3] の時期を「西洋への接触」という小見出しをつけ、次のように述べている。「16世紀半ばから17世紀半ばに到る100年間は、二重の意味で日本史の転換期であった」⁽¹⁶⁾。こう述べ、次の2点をあげている。それは鉄砲・キリスト教の伝来と武士権力の中央への集中である。鉄砲はそれまでの軍事戦略を変え、信長・秀吉・家康による武士階級の全国統一を促進した。軍事力を背景として成立した徳川幕府＝政権は、「その成立（1603）からおよそ半世紀の間に、封建大名の力を弱め、さらに中央政府の統制力を強めた。17世紀の半ばの徳川幕府は、全国支配のための官僚機構を整備し、全国の耕地のおよそ6分の1を直接に管理し、鉱山の大部分を抑え、主要都市を直轄し、通貨の鑄造権を独占し、海外貿易を統制して、直轄の軍隊8万人（秀吉の場合にはおよそ1万、・・・10万石の大名の兵力はおよそ2000人・・・）を動員できる状態にあった」⁽¹⁷⁾。こうした圧倒的な経済＝軍事＝政治力を背景に、その後およそ300年の徳川幕藩体制は継続したのである。

加藤は [4] の時期をこう述べている。「第4の転換期は19世紀であり、経済的には、すでに18世紀後半に著しかった市場の全国化・農産物の商品化・貨幣経済発展の傾向が、・・・19世紀の前半にいよいよ進んだ。・・・都会の貧富の差は極端になった。上層町人は豊かで、大名たちは財政的困難にもかかわらず浪費をつづけ、下層の武士は貧しく、下層の町人の生活程度は低かった。農村にもまた、地主層と貧農の分化が進み、地主層の一部は、問屋制家内工業（または『マニユファクチュア』）を経営し（殊に綿糸・生糸・織物）、貧農はしばしば一揆にたち上って、都会の貧困層の『打ちこわし』と呼応していた。このような前半の状況から政府（藩・幕府・明治政府）の精力的

な介入と、外国技術の組織的な導入を通じて、資本主義的工業化の過程がはじまったのが、19世紀の後半である」⁽¹⁸⁾。

この第4期以降の叙述においては第3期までの叙述におけるほど、加藤は土地制度を規定的な要因として叙述してはおらず、最後の [5] の時期の戦後の土地制度についてはまったく触れていない。なぜふれていないかを付度（そんたく）すると、次のように考えられよう。社会の構造と発展に関するマルクス主義の歴史観（史的唯物論）は、社会生活の基礎を物質的な生産力におき、社会の歴史的発展はそれにもとづく、とする。そして生産力と生産関係が社会の下部構造を規定し、それに照応した上部構造が形成される。物質的生産力の変化は下部構造を変化させ、それにつれて上部構造が変化し、社会全体も変化し発展する⁽¹⁹⁾。加藤が唯物史観にもとづいて社会の変化と発展をとらえていたことは明らかだが、明治維新以降の日本の近代社会においては下部構造における土地制度の決定的な意味が、それ以前の土地を生産力の基盤とした社会（農業社会）と比較すればうすれ、工業生産力とそこでとり結ばれる資本賃労働関係が社会を規定する主要因⁽²⁰⁾となった、とらえていたからであろう。しかしより重要なことは、社会発展における「土地私有化」「大土地所有」「地主権力」の意義を加藤が確認したうえで、『日本文学史序説』「あとがき」で述べる次のことである。筆者は戦後日本資本主義を総体把握するための視角耕耘の要諦がここにあると見る。

つまり『日本文学史序説』という『史』すなわち『歴史』の解釈は、単に過去の個別的な事実の年代的順序に従う叙述ではなく、前の事実を踏まえて後の事実の生じる一すじの流れ、またはその意味での発展を、明らかにしようとする試みである。文学の発展のすじ道は、全体としては、文学外の条件を考慮しなければ、明らかにすることができない。著者（加藤＝引用者）はここで、日本の土着世界観が外部からの思想的挑戦に対して各時代に反応してきた反応の系列を、それぞれの時代の社会的条件のもとで、その反応の一形式としての文学を通じて、確めようとしたのである。『土

着』とは英語の indigenous (仏語の indigène) で、外部からの影響がなく、その国の土から生れ育ったというほどの意味である。『世界観』(独語の weltanschauung) は、存在の面のみならず、当為の面(価値観)も含めて、人の自然のおよび社会的環境に対する見方を包括的にいう。・・・『日本文学史序説』の目的の一つは、——しかしそれが全部ではない——、第三の方法(外来の体系の『日本化』の過程を分析し、『日本化』の特定の方向から、『日本化』を実現した土着世界観の力の方向を見つける——引用者)により日本人の心の奥底、そこに映った世界の姿、土着世界観の構造を知ろうとすることであった⁽²¹⁾。

加藤の考え方を要約すると、以下のとおりである。日本文化の歴史発展のパターンとして、新しいものが受容される時、新旧の交替となるよりは、古いものに新しいものが加えられるという発展のパターンが原則をなしている。「超越的な価値を含めぬ世界観は、排他的でない。故に新を採るのに、旧を廃する必要もない。しかも、新思潮が外部から輸入された場合には、内発的变化の場合と異り、土着の世界観の持続性がそのために害われるおそれは少なかったはずである」⁽²²⁾。武田清子もこの点について次のように批評している。「本人(加藤——引用者)の世界観の歴史的な変遷は、多くの外来思想の浸透によってよりも、むしろ、具体的な感情生活の深層に働くところの持続と、そのために繰り返された外来の体系の『日本化』によって特徴づけられる」⁽²³⁾と。

筆者が延々と山田の「土地所有の画期と時期区分」と加藤のそれとそれにかかわる叙述をつき合わせ、『日本文学史序説』の目的や日本文化の特徴を引用したのは、日本の場合土地所有が「下部構造が上部構造を規定する」という史的唯物論の原理の一般にとどまらず、外来体系によって変形された土地所有があたかも「土着の世界観の力」となって、戦後も含めた近代以降の日本・日本資本主義を染め上げたのではないかと考えるからである。「外来の体系」である欧米資本主義が開国によって日本に押し込まれ、その外来・欧米資本主義が日本資本主義として定着する過程が「日本化

の過程」である。「日本化」した資本主義を実現した「土着の世界観の力」が土地所有、すなわち戦前では「半封建的土地所有制＝半隷農的零細農耕」ではないか、と考えるからである。この視角は山田盛太郎の『日本資本主義分析』の方法に通底する。土地所有が「土着の世界観の力」として、戦後日本にも貫かれているのではないか。つまり「土地所有(個人の零細土地所有と資本・企業の大土地所有)」が戦後の日本資本主義をデフォルメした「土着の世界観の力」なのではないか。そして今度はそこから逆照射するようにして、欧米資本主義をとらえ返す。そうして見ると見えてくる日本資本主義は別類型の資本主義として、とらえ得るのではないか。再把握できるのではないか。このいわば方法論上の「仮説」を耕耘するために、先ほどらい延々とした作業を、筆者はおこなってきたのである。

もちろん、加藤の仕事は、いうまでもなく日本資本主義分析ではなく「日本の土着世界観が外部からの思想的挑戦に対して各時代に反応してきた反応の系列を、それぞれの時代の社会的条件のもとで、その反応の一形式としての文学を通じて、確めようとしたものである」⁽²⁴⁾。そのことは筆者も充分承知している。しかし分析の方法論、視角を耕耘するうえで、加藤の仕事を学ぶ意義はおおいにあると思う。だがいわばこうした「土着世界観」なる見方、別な言い方をすれば日本の巨大な変化、とくに思想の変化にもかかわらず「変わらないもの」をつきつめて行く知的営為は、加藤にとどまらなかった。先達としてこの作業を戦後追求してきた思想家が丸山真男である。

2. 丸山真男の土地所有・時期(政治的変革)区分、そして「執拗低音」

丸山は全体構造としての日本精神史における「個性性」を「外来文化の圧倒的な影響」を受けつつも「執拗に残存」する「日本的なもの」の「えたい」を論及し続けた思想家である。小稿では、その知的営為を「原型・古層・執拗低音」,「思想史方法論についての私の歩み」⁽²⁵⁾と副題についての講演記録をたどりながら見てみよう。丸山はそ

の営為のスタートを「戦後」体験におく。

「戦後になってすぐ私の頭に浮んできた反応は、戦争中の思想的な鎖国がとけたということです。つまり敗戦まではご承知のように日本は非常に厳しい思想統制を敷きました。・・・それがご承知のように、戦後にはどっと『開国』になったわけです。『鎖国』から『開国』へという現象——それが一研究者としての私の目の前にひろがった現実だった。学問的な考察の以前に、日常現実の体験としてそれがありました。解放されたという感覚は、同時に思想的な開国を意味したわけです。その時私にダブル・イメージとして映ったのが明治維新だったのです」⁽²⁶⁾。丸山はこのようなダブル・イメージを背景として、「開国」という問題の思想史の意味を考える。丸山は「開国」をキーワードに日本史の時期区分をおこなう。「7世紀の大化の改新から律令制度の建設（**1**）⁽²⁷⁾という一連の過程は明治維新と並ぶ、日本史における二大転機」⁽²⁸⁾とした上で、第1の開国をキリシタン（1549年）・南蛮文化の渡来（**3**）、第2の開国を幕末＝明治維新（**4**）第3の開国を1945年の敗戦（**5**）としている。丸山のこの叙述はマルクス主義の「歴史発展段階論」を下敷きにしてはいるが、「私はかつてマルクス主義者であったことはありませんけれども、何と云っても時代から言って思想的および学問的に非常にマルクス主義の影響を受けて来ました。当面のテーマ（開国）に限定するというならば、普遍史的な歴史的發展段階があることを当然の前提として思想史をも考えていた」⁽²⁹⁾。しかし「私は哲学的にマルクス主義に疑問を持っていましたし、また上部構造としての思想史という立場だけで思想史の解明が出来るか、ということについても、すくなくも私の勉強したマルクス主義者の説明では納得が行かなかった。けれども、思想史も歴史にはちがいないし、歴史を考える上ではやはり世界中にあてはまる歴史的發展段階があるはずだというのが、私の基本的な考え方」⁽³⁰⁾であると、丸山は述べている。

このように述べた後に『縦』の歴史的發展段階について、「どうしてもそれだけでは幕末維新の思想的景観を、さらに、今度の戦争以後の思想的文

化的景観をとらえきれないのではないか」と方法上の不十分さを述べて、方法論の彫琢を試みる。丸山は歴史的な縦の線をたどりながら、いわば『横から』の急激な文化接触という観点を加えることによって方法を補強し、とらえきれないものをとらえようとする。すると日本の「開国」に見られるような『横から』の急激な文化接触は西ヨーロッパではルネッサンス以降にはなく、日本・東アジアにおける特有の問題である。この『横から』の急激な文化接触こそが「開国」という歴史的现象であり、横からの異質な文化の日本の受容の仕方に歴史貫通的な「思考・発想のパターン」⁽³¹⁾がある。それを明らかにすることによって初めて、思想的文化的景観をとらえきることができる、という結論に丸山はたどりつくのである。

この丸山の異質な文化の日本における受容の仕方の「思考・発想のパターン」は「原型」→「古層」という順序をたどり、結局「執拗低音（バス・オスティナート）」に落ち着くことになる。その経緯は理解しておく必要があるので、簡単にふれておこう。「原型」を「古層」に変えた主な理由は、「原型」というと一番「古い」時代という歴史的發展段階、時間的な概念と誤解されかねないので「古層」という表現に変えた、という。また「古層」を「執拗低音（バス・オスティナート）」に変えた理由は、マルクス主義の「土台」のように誤解する人が少なくなかったからだ、という。こうした変遷を経て、異質文化の日本的受容の仕方における「思考・発想のパターン」を「バス・オスティナート（basso ostinato）」ととらえる。それは「低音部に一定の旋律をもった楽句が執拗に登場して、上・中声部と一緒にひびくのです。一つの音型なのですけれども、必ずしも主旋律ではないのです。主旋律はヴァイオリンやフルートのような木管で上声部に奏せられても構わない。ただ、低音部にバス・オスティナートがあると、主旋律に和声がつくだけの場合とは、音楽全体の進行がちがって来る。かりにこの比喩をもちいて日本思想史を見ると、主旋律は圧倒的に大陸から来た、また明治以後はヨーロッパから来た外来思想です。けれどもそれがそのままひびかないで、

低音部に執拗に繰り返される一定の音型によってモディファイされ、それとまざり合って響く。そしてその低音音型はオスティナートといわれるように執拗に繰り返し登場する⁽³²⁾。

音楽の素養がないとなかなか理解ができないが、辞典の記述を要約すると「執拗低音（バス・オスティナート）」とは、「ある一定の音型を同一声部で何度も繰り返す手法で、低声部に置かれたものをとくにバス・オスティナート（固執低音）という⁽³³⁾。バッハのシャコンヌ（パルティータ第2番最終楽章）が有名であるが、変奏曲形式と結び付いたり、ラベルの「ボレロ」のように、リズム面に応用されたりするものもある。執拗に繰り返される低音主題の上声部で、連続して様々な変奏が展開される古典的音楽形式のことを総称してバス・オスティナートと呼ぶ。この時執拗低音そのものは確固としたメロディを持たず、その上で変奏される主旋律を支える役目のみを担うが、変奏される主旋律は次第に執拗低音の影響を受け時には大きく変質させられ、独自のメロディを奏でることになる。この音楽を変質させる聴こえざる力＝執拗低音こそが、執拗低音による音楽の本質となる。

聞き覚えがあるラベルのボレロを思いだすと、曲の始まりは聞こえるか聞こえないか位の音のスパアドラムの

「タン・タタタ・タン・タタタ・タン・タン
タン・タタタ・タン・タタタ・タタタタタタ」
というリズムから始まり、次第に大きくなりまた小さくなり、それが全曲15分間ずっと続く。そして同じメロディのパターンを様々な楽器が演奏する。このリズムの部分が丸山の言う執拗低音である。丸山は日本文化の本質は執拗低音としての文化であり、そこへ入ってきた別の主旋律、例えば儒教・仏教・西洋思想などを変奏することで、「日本らしさ」を形成してきたのだと結論づけた。曰く、『『思想』にかぎりますが、日本の多少とも体系的な思想や教義は内容的に言うところ古来から外来思想である、けれども、それが日本に入ってくる一定の変容を受ける。それもかなり大幅な『修正』が行われる。さきほどの言葉をつかえば併呑

型ではないわけです。そこで、完結的イデオロギーとして『日本的なもの』をとり出そうとすると必ず失敗するけれども、外来思想の『修正』のパターンを見たらどうか。そうすると、その変容のパターンにはおどろくほどある共通した特徴が見られる⁽³⁴⁾。ここまで来ると、丸山の「原型・古層・執拗低音」は加藤の「土着世界観」とクロスすることが分るだろう。

この方法を駆使して丸山は、縦の歴史的発展段階論でとらえきれない問題を、いわば横波の「衝撃論」を組み込むことによってとらえようとする。それを具体的に述べたものが、次の2点である。

「朝鮮半島を含む中国との大規模接触と大化の改新から律令制度の建設」と「西欧の衝撃と明治維新」という日本史における二大転機・横波「仮説」である。ここでは、当面の筆者の問題関心から、後者の明治維新を検討してみよう。やや長いが引用する。「大化改新とならぶ大変革である明治維新を一例にとって見ます。維新の生産関係の変革を集中的に表現しているのは、ご承知のように明治5、6年の地租改正です。これによって、地主に対して完全な土地所有権を与えたから、これはあきらかに農地改革です。ところが当時の地主というのは直接耕作者かというところ必ずしもそうではない。江戸幕藩体制の内部においてすでに地主と小作との階級分化が進行し、かなりの程度、不在地主も生じていた。たとえばフランス革命ですと、直接耕作者（日本でいえば小作人）に土地の所有権を与え、貴族の土地は無償没収です。これが『古典的』なブルジョワ革命になるわけです。ところが日本の場合、小作人の小作料は江戸時代の五公五民に近い高額が保証され、フランス革命にあたるような、原則として直接耕作者にのみ農地所有権を認めるようになったのは戦後の農地改革です（この場合も山林地主は除外されました）。これが、明治維新というのが果して不完全であるにしてもブルジョワ革命といえるのか、それとも絶対主義の樹立なのかをめぐって、先ほど申しましたような、労農派と講座派の激しい論争が生じる一つの背景です。ということはやはり明治維新という非常にドラスティックに見える変革でも、意外にそ

の前の体制との間に連続性があるということの意味しているわけです⁽³⁵⁾。あきらかに丸山は『修正』の「パターン」を問題にしている。そして丸山はパターンを媒介する「執拗低音」をうみだす「ドラム」を「土地所有」に見立てている。こう丸山を理解するとどうであろうか。

以上前段では加藤「土着思想」の力、後段で丸山「執拗低音」を論じてきた。そこで次に、この学習を生かして、次の作業に入ろう。それは山田盛太郎『日本資本主義分析』をその視点で読み直すことである。

2. 加藤「土着思想」・丸山「執拗低音」の方法からの山田『日本資本主義分析』再読

陸軍や海軍の軍事工場（工場）の躍進に見られるような戦前の日本資本主義の発展は、究極的には農村における、純粋ではないが半ば封建的な関係に支えられていたと、言える。農村における半封建的な関係とは、天皇制国家の縮小・凝縮された姿でもあった。この関係を支える基礎的な統治原理は、君（天皇）への「忠」と親への「孝」である。家長（親）への「孝」は絶対であるという観念は、天皇を国の家長に見立てて、家長の権力は絶対であるという家族国家観へと高められ、政治支配の理論として機能していたのである（「家長的家族制度」）。ちょうどフランス革命後のフランス農民が農地を無償配分され、ナポレオンの熱烈な支持者（「ナポレオンの観念」となったように、農民は自作農を中心として天皇の熱烈な支持者となり、絶対主義天皇制を支える基盤となり、君（天皇）への「忠」原理の具現者となった。

この原理は次に述べるような経済関係によって成り立っていた。自作農家は、養蚕という農家副業（「老幼婦女の微弱なる労働」）に助けられてはじめて農村の中軸としての体面と地位を維持できたのである。かすり伊勢崎手織りの里よ / かかあ天下も自慢のひとつ / 女房いなけりや夜も日も明けぬ、と「正調八木節音頭」8番に唄われるほど、上州、いや全国の絹・綿製糸織物産地の「かかあ」は夫のため家族のためには労をおしまなかった。また農村の下層に位置する小作農家は両

親と未婚の長男が農業に従事し、娘や時には母親が自家や近くの家内工業の工場（「惨苦の茅屋」＝いたましい程のあばら家）で絹糸紡績や絹織物で手間賃を稼いで家を支える。また娘や次三男坊が都市の繊維産業や大工場に出稼ぎに出て、厳しい労働に肉体をすり減らしながら低賃金の中から仕送りをして故郷の家を支える。「雪が降ってくりゃ、野麦峠には銭が降ると思って行け」と親にいわれ、飛騨高山から製糸工場のある岡谷・諏訪に抜ける雪の野麦峠は工女たちの赤い血で染まったという。当時飛騨地方の田んぼ1反歩が100円か150円の時に、年季明けには100円を持ち帰る「百円工女」もいたという。しかし工女たちの「糸引き」労働は、1000人あたり死亡者23人という推計が示すように、過酷この上ないものであった。その7割が結核だったという⁽³⁶⁾。収穫した米の7割近くを地主に持ってゆかれ、肥料や種代を除くと手元に2割弱しか残らない小作農家は、食うだけで精一杯の暮らしを家族間の相互扶助によって、ようやく維持できたのである。この農村の頂点にいたのは地主であった。地主は税（「控訴諸掛」）を納めても、およそ全収穫の3割5分で暮らしを維持し、地位を保持できたのである。地主は所有農地を自身で経営するより、細かく分けて小作に貸出し小作料を取った方が経済的に有利であったから、小作農家に寄生する、文字どおりの「寄生地主」になったのである。「かくの如き。土地所有者たるの資格が圧倒的に優位を占める・・・場合においては、利潤を目標とする資本主義的経営の成立しうる余地」⁽³⁷⁾はない。農業経営者（資本家）が地主に収穫物の7割近くの地代を払わねばならないとすれば、到底経営は成り立つはずがない。ここに「利潤の成立を許さぬ全剰余労働吸収の地代範疇＝地主資格」が成立することになる。そしてこの「地代範疇＝地主資格」は、小作人が地代を地主に納め、地主が税を国家に納める事によって成立することになる。そしてこの7割近くにもなる「地代と税」は、とうてい資本主義的経済法則から導かれたものではなく、絶対主義天皇制国家の「公力＝強力＝〔経済外的強制〕」によって可能となったのである。徳川幕府・封建制顔負けの「半

封建的」性格といえよう。この税が強力な軍事力を確保するための軍事工業(軍工廠)の原資となったことは言うまでもない。

こうした経済関係が土台となって、親を支える子の親孝行の観念＝「孝」は、国の家長・親である天皇を支える「忠」という観念に二重写しとなって、国家的な規模にまで拡張されていった。親への孝の観念の中で生き孝行を尽くす小作農民にとって、天皇の赤子として、国の親である天皇への「孝」を尽くすこと＝「忠」は当然とされた。儒教的「忠と孝」の観念は、日本国家を異様なまでの神がかりの国に肥大化させていった。こうして、国家の頂点に立つ天皇を、底辺の農村が支えるという構造は、戦前日本資本主義＝日本国家の強さを意味していた。この忠と孝の観念はすでに述べたように、同時に経済的な強さも意味していた。すなわち親孝行の証である賃金(手間賃や仕送り)の補充があるからこそ、小作農家は高率小作料を支払えるのである。また逆に家計補充であるから低賃金が成立する。また親元の家計を支えねばならないからこそ、故郷の家が自分をあてにして待っているからこそ「肉体消磨的労働条件」過酷劣悪な労働にも耐えようとする。半隷農的小作料支払い後の僅少な残余部分と妻や娘の機織などの低い賃金の合計で貧しい一家の家計・暮らしがようやく成り立つ。「かかる関係の成立こそは半隷農的小作料と半隷農的労働賃銀との相互規定関係存立そのものを意味する」⁽³⁸⁾。この相互規定が2層構造アーチ(「二層穹窿」＝屋根を支える太い半円形の梁)となって、軍事重化学工業をささえ、さらにその上に聳え立つドーム(伽藍)である「天皇制＝軍義的農奴制的官府」を支えているのである。この相互規定のうちにある日本資本主義の歴大な寄生的地盤＝恥部⁽³⁹⁾こそが「日本資本主義興隆の絶対的要件」であり「日本資本主義存立の地盤」なのである。

しかし、この「相互規定関係」、戦前日本資本主義・国家の強さの「絶対的要件」「地盤」は崩れはじめ、強さは逆に弱さに転化する。第1次世界大戦後の戦後恐慌(1920大正9年)は、繭価の暴落による養蚕(農家)の破綻と輸出産業である絹糸

紡績や絹織物などの繊維産業を破綻させ、「相互規定関係」「存立の地盤」を掘り崩していった。農村生活の破綻的な状況のもとで、農民たちは天皇制国家の支配原理の虚妄性に気づき、国家は揺らぎ始めることになる。絶対主義天皇制国家・政府は、この危機の打開を国内の強圧政治と中国大陸へのあてもない侵略戦争によって回避していこうとする。だが資本は自らの意に反して、この流れに反対し抵抗する勢力＝労働者を訓練し階級に育て上げる。「生産機構＝労役機構は労働力を陶冶する」⁽⁴⁰⁾のである。日本資本主義の基軸であり最重要産業である「軍事機構＝鍵鑰(キイ)産業は、必然的な事情の下に、最も良く透視のきくまた最も質量的な労働力を陶冶する。当該プロレタリアートの客観的作用遂行の問題【＝革命】における応答的【必要】条件はここに成立する」⁽⁴¹⁾。

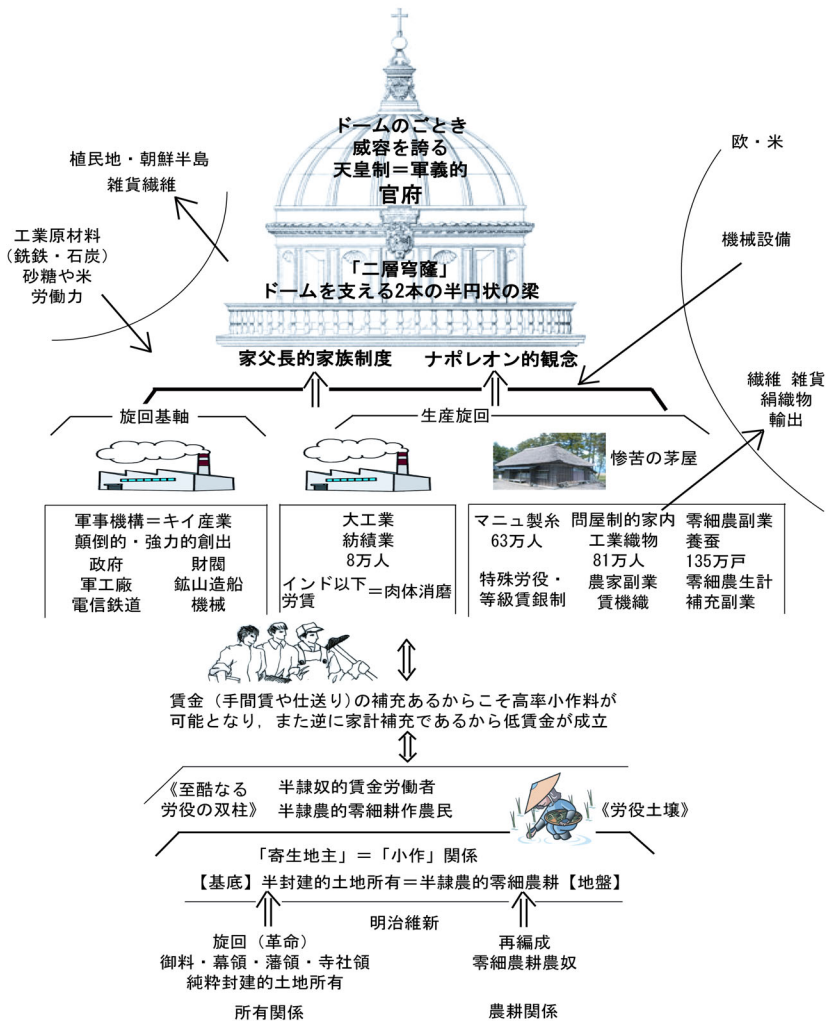
陸軍工廠、海軍工廠、製鉄所や炭鉱、あるいは繊維関連大工場での労働の中で、労働者は組合を結成し労働争議で資本に対抗する。こうした労働者の中で旋盤工、ミーリング工、製罐工などが重要な役割を果たすが、なかでも「労働力群編成の枢軸として・・・最も透視のきく」⁽⁴²⁾リーダーとなりうる労働者は旋盤工達である。工業の「基本技術」にかかわる旋盤は機械を作る機械＝工作機械(マザー・マシン)のひとつで、機械制大工業の中枢に位置する機械である。その操作(労働)は当時の水準においても数百分の1ミリの精度を要求されたが、その労働の質・内容からも分かるように、旋盤工は「科学的技術的な熟練と体力とが所要とせられ、したがって厳格なる修練が施され」⁽⁴³⁾た者達だったのである。物事をきちんと見つめ、やり遂げる能力を彼らは身につけていく。「軍事機構＝鍵鑰産業」における、「厳格な修練」を経た「頑強、強靱なる『鍵』労働力」⁽⁴⁴⁾をもつ彼らこそが、「資本主義生産過程それ自体の機構によって訓練、結合、組織」⁽⁴⁵⁾された者＝プロレタリアートであり、来るべき〔日本革命〕の担い手となる。

その場合、日本革命の第一の課題は、「資本主義改更」すなわち社会主義革命に置かれるわけではない。「半封建的土地所有制＝半農奴制的零細農

耕」は、日本資本主義の岩盤である地主制と大工業をささえた。これによって軍事警察的絶対主義は存立し得たのである。しかもそれが「忠孝」の思想的土台となって天皇制イデオロギーを支えていたのである。まずこの打破が求められることになる。農村の半封建制の打倒を中心任務としたブルジョワ民主主義革命がプロレタリアートの当面の目標になる。当然のことながら当事者である農民との同盟は不可欠である。「労農同盟」の形成によって、軍事的警察的絶対主義の打倒と、農村における土地改革を主眼としたブルジョワ民主主義革命を目指しながら、その先に社会主義革命を展望する。曰く「プロレタリアートがプロレタリ

アートとしての基本型列と基本線とにつくものとなる。軍事的半農奴制的な日本資本主義の厩たる地盤を構成する所の半隷農的零細耕作農民での基本線は、その下にそれへ統合するものとなる。両基本線の統合【労農同盟】での規定的展望は、諸々の労役型の分解とその二層穹窿、二重の基礎原理の壊類の客観的過程において、その科学的必然の客観性が与えられる」⁽⁴⁶⁾。

『日本資本主義分析』は『日本資本主義発達史講座』掲載の一連の諸論文（1932年5月～1933年9月）をまとめたものであるが、同時期に発表された「三二テーゼ」（1932年5月20日「インプレコール」独語版発表年月日）とシンクロする性



格の著作であった。「三二テーゼ」は日本の支配構造を天皇制・地主的土地所有・独占資本主義の3要素から分析し、ブルジョア民主主義革命から社会主義革命への強行転化を説いたコミンテルンの日本革命の方針書である。「全機構揺撼(ヨウカン)によって象徴付けられる所の一般的危機の進展」⁽⁴⁷⁾の時代に、「暴圧の身に迫るのに抗し、激動の時代のうちに科学を担うものの使命をみてとった、当時なお少壮とみられる科学者たちの一団は、・・・『講座』に抛りつつ、・・・この国の歴史に『変革の科学』の礎をおき、そこに不滅の文字を刻むことになるのであって(いわゆる『講座派』マルクス主義の成立と『資本主義論争』の開始)、じじつそれは、やや逆説めくが、そうした歴史的時機だけが、またそうした『限界状況』若さだけが、産みだしえたにちがない、ひとつの記念碑的事業」⁽⁴⁸⁾であった。この「事業」は「当時のこの人たちの身边から推して、それはもはや己が生存それ自体の『証し』だったのであり、『資本論』の「師・先人の説をうけついで学問を進め、述べる祖述者」としての生涯を送ろうというような者には、とうてい成し得ない「事業」であった。

以上が加藤「土着思想」、丸山「執拗低音」の検討の後、読みなおした山田盛太郎『日本資本主義分析』の要点である。再度、加藤と丸山の視点でそれを布衍すれば以下のとおりである。「西欧の衝撃」は経済面というと輸入・移植された欧米の資本主義(生産手段)との出会いである。それが日本のいわば「土着思想」「執拗低音」とも言うべき「半封建的土地所有＝半隷農的零細農耕」すなわち「半封建的基盤」に接触したとき化学反応を起こした。この「半封建的土地所有＝半隷農的零細農耕」というのは、丸山の叙述⁽⁴⁹⁾をもってすれば、直接耕作者である小作人には土地所有権は与えられず、封建領主たちの領地＝土地所有権はかたちを変えて温存され、江戸時代と同じ高額の小作料も保証された、ということである。丸山の言う「横からの異質な文化」の日本の受容の仕方における歴史貫通的な「思考・発想のパターン」のことである。丸山は「パターン」というような言い方で、受容の仕方いわばソフト面を強調してい

るが、それは思想面を考察する場合にはそうなるであろう。だが実体を問題する場合にもその方法は援用できると思われる。「横からの異質な文化」が「執拗低音」である「半封建的土地所有＝半隷農的零細農耕」という「半封建的基盤」と接触したとき、どの様な化学変化・反応が起き、なにが生成されたかをみる際の分析視角・方法としても、その方法は有効だと考えられる。

農家の娘と次三男は、この土壌からしみ出るようにして農村家内工業・工場制手工業や都会の大工場の労働者となっていく。欧米の資本賃労働関係は、モディファイされ日本型に铸なおされる。農村内工業で働く娘の賃金と都会の大工場の男女職員の賃金は、実家である農家の生計費を補充する。生計補充的であるから賃金水準は低く抑えられ、また家計を補充しなければならないから厳しい労働にも耐え得る。戦前の労働者を半隷奴的賃金労働者という理由がここにある。「日本産業の花形とまでよばれる日本紡績をも含めた一般産業における低賃金。まことに身を消磨してゆくほどの低い労働条件。そのようなもとに働きにゆく膨大な労働力群を流れ出でしめるいっそう低い農村経済生活条件の存在一すなわち、日本資本主義の半封建的基盤がここに存するのであります」⁽⁵⁰⁾。欧米の労働者はこのようにしてモディファイされて、日本の労働者になった。これによって「自作農」は農村の中核としての体面を保て、小作人は何とか暮らしていけ、地主は高額の小作料を徴収でき、地租を国家に納めることが出来る。威容を誇る「天皇制＝軍義的半農奴制的官府」政府はこうして維持される。この相互規定の厩大な寄生的地盤＝恥部こそが「日本資本主義興隆の絶対的要件」であり「日本資本主義存立の地盤」なのである。第1次世界大戦後の戦後恐慌(1920大正9年)から続く世界恐慌(1929年)によって「半封建的基盤」・農村は壊滅的打撃⁽⁵¹⁾を受け、2本のアーチ(「二層穹窿」)は威容を誇る「天皇制」をささえきれなくなった。「天皇制」を支えた2つのイデオロギー「家父長的家族制度」と「ナポレオンの観念」は、大きく揺らぎ崩落し始めたのである。したがって15年戦争(1931昭和6年～1945昭和20年)は、

農村解体・破滅を中国大陸への侵略によって防遏しようとした絶対主義天皇制政府の選択なき選択・「国策」であった。

Ⅲ. まとめ——戦後日本の「土着思想」・「執拗低音」

1945年8月15日、無条件降伏で戦前日本・軍事的＝半封建的帝国主義国家は瓦解した。加藤周一は東京大空襲犠牲者を本郷東大病院で治療したのち信州上田で、丸山真男は広島陸軍船舶司令部で被爆二等兵として、そして山田盛太郎は機能停止の上海東亜研究所の職員として、それぞれの敗戦を迎えた。

丸山はこの敗戦を「第3の開国、敗戦・全面開国」として、「第1の開国、キリシタン・南蛮文化の渡来」、「第2の開国、幕末・明治維新」と並ぶ「文化接触」「衝撃」と、とらえた。しかし、管見によれば丸山は「原型・古層・執拗低音」という日本思想史における方法論上の劃期としては触れてはいるが、敗戦後の「日本思想」そのものは論じてはいない。すなわち「戦後日本の巨大な変化、特に思想の変化、その変化にもかかわらず変わらないものをつきつめる知的作業」を十分に果たせぬまま世を去った。加藤は、敗戦が政治・経済・社会・文化の大変革期であったことを認めた上で、「著者自身がその渦中にあった一時代の文化と同時代人の仕事客観的に眺めることは、遠い時代を振り返る場合よりも、はるかにむずかしい」⁽⁵²⁾とし、「整理の試み」にとどめている。

山田にとっては『日本資本主義分析』で展望した【革命】の機会が12年目にめぐって来たことになる。「【労農同盟】」での規定的展望は、諸々の労役型の分解とその二層穹窿、二重の基礎原理の壊れの客観的過程において、その科学的必然の客観性が与えられる」と述べた展望である。「日本資本主義は・・・敗戦（昭和20年8月15日）とともに崩壊した。日本の史上における一階梯としての軍事的半封建的、日本資本主義は、明治維新以来、敗戦に至るまでほぼ4分の3世紀にわたるその歴史的生涯をここに了えた。一の階梯が終り、新た

な、より高次の階梯が劃期されようとする。その劃期＝変革〔民主主義革命〕の基本過程となるころのものは、旧構成の基抵〔半封建的土地所有制＝半隷農的零細農耕〕における変革的な再編でなければならぬ。かくして次の点が明らかである。日本における土地問題の解決は、現在、進行中の、日本民主化の過程における最も基礎的な一要素を構成する。その意味において、今次の農地改革は、民主主義革命期日本における最も重要な課題をなすところのものである」⁽⁵³⁾。山田はこう述べて、これ以降農地改革の研究に全精力を傾注する。

「日本農業の方向は自ら与えられます。すなわち、第一。日本農業の変革は小作関係重圧と零細耕作との相互規定の構造を揚棄する方向に向けられねばならぬこと。したがってまず小作関係の重圧から解放することによって経営改善＝拡大の指向を促し、日本農業の構造上の型の高度化を指向すべきこと。第二。日本農業の構造上の型の高度化に対して、技術的基礎を準備すべきであること。かくのごとくして、日本農業の、より高度の、本格的な農業構造への再構成を達成しうるならば、そのときはじめて、日本の歴史上、第五の劃期が、その意義を獲得するに至るものとするのであります」⁽⁵⁴⁾。戦後の「民主主義革命」において最も規定的と山田が考えた「農地改革」は、たしかに耕作者に土地所有権が認められ、その点では明治維新で積み残されたブルジョワ革命の課題、山田が「第一」としてあげていた課題は達成された。しかし農家1戸あたりの耕地所有面積は平均1ヘクタールで、とうてい農家が自立できる経営面積ではなかった。「零細農耕」は取り残されたままで、山田が「第二」に掲げた「本格的な農業構造への再構成」は達成されず今日まで残された。だがその残された課題＝「零細地片私的土地所有＝零細農耕」は農村にとどまらず都市へと拡散し、資本・企業の土地所有、さらには都市勤労者の「小規模住宅地所有」問題へと拡大していった。それが冒頭に掲げた「土地」にまつわる悲喜劇を生み出した。

こうしたことが可能となったのは、おもに次のふたつの理由による。第1に有効な制限原理をと

もなわない土地の「絶対的私的所有権」が認められ、封建領主並みの「土地所有者たるの資格の圧倒的」な優位は保持された。そして第2に不徹底な「農地改革」によって細分化された零細農地・土地「所有」は、「土地の切売り」・売買を容易にした。高度経済成長による太平洋ベルト地帯への資本・企業の集中・集積は地代・地価高騰の強い要因となった。地価騰貴は1951年から1990年までのおよそ40年間継続した。「土地神話」が語られ、土地は投機の対象となり、キャピタルゲインは発生し続けた。小坂明子が歌った「白い家」・庭付き一戸建て住宅は、地価上昇によって「売ればこれだけになる」というサラリーマンの期待値・幻想を生み出した。同時に零細農地、とりわけ都市近郊の農家は、地価上昇の「恩恵」に浴した。土地所有者たる資格の圧倒的優位は、戦後保守政治に最も苦しむ勤労者と農民、とりわけ農民が保守政治の分厚い支持層になるという転倒的観念を生み出した。没落させられる者が没落させる者を熱狂的に支持する「ナポレオンの観念」は戦後にも継続したのである。

戦後日本資本主義は、アメリカの冷戦体制構築という世界プロジェクトの一環として〈外から〉日本政府も関与して〈上から〉立ち上げられたのであるが、その時本来無価値であるはずの土地を資本と見立てたのである。右肩上がり地価の「含み益」は、およそ40年間（1951年～1990年）継続し、企業・資本の借入れを可能にし、生産設備などの現実資本に転化した。また、企業・資本はこの土地を投資・投機の対象にして、莫大な利益をあげた。

そしてもう一点、日本の「高度成長」＝「高蓄積」にとって欠かせないのは、厳しい労働に耐える低賃金労働力の存在である。「自動車絶望工場」の著者・鎌田慧は「当時の出稼ぎは中高年が8割、残りが若者だった。今と逆ですね」という。1970年代初頭、鎌田の故郷・東北の出身者を中心に、全国で年間約55万人の出稼ぎ労働者が主に工業部門へ送り出されていた。同時に農村の若者たちも「中卒・金の卵」という若年労働者として都会の職場に出かけていった。零細農地＝農家所得で

は食えない農民は都会への「出稼ぎ」によって、「田舎の家」の家計・暮らしを維持したのである。また兼業によって何とか暮らしをたてた。いずれにしても、高度経済成長による人手不足が農漁村から猛烈な勢いで人を吸い上げ、農村は労働力を排出する「労役土壌」となった。家計補充的であるから低賃金が成り立つ。また逆に、低賃金でも帰るべき田舎の暮らし・農業があるからそれを甘受し、過酷な労働にも耐える。これらに関わるもろもろの話は、経済大国日本のもう一つの側面である。アメリカからもち込まれた外からの「仕組み」が日本の「基盤」＝土地所有に接触して「日本的な仕組み」に転化した。丸山の言う「第3の開国・敗戦・全面開国」で「横からの異質な文化」＝「アメリカ民主主義」が「執拗低音」とも言うべき「零細地片私的土地所有＝零細農耕」という「四分の一封建的基盤」と接触した。この時どの様な化学変化・反応が起き、そこになにが生成されたのか。中断した「農地改革」の結末、遣り残した問題が今日浮上してきている⁽⁵⁵⁾。

注

- (1) http://listen.jp/store/artword_1000883_1361.htm (2008. 8.10 アクセス)
- (2) 上野千鶴子『家父長制と資本制』（岩波書店、1990年）194頁。
- (3) 「朝日新聞」1995年7月9日、朝刊5頁。
- (4) 飯田清悦『一流会社の含み資産』（三一書房、1966年）174頁。
- (5) 「朝日新聞」1990年7月20日、朝刊9頁。
- (6) 「朝日新聞」1986年8月30日、夕刊7頁。
- (7) 山田盛太郎『日本資本主義分析』（岩波書店、岩波文庫、1977年）236頁。
- (8) 丸山眞男「Ⅲ、原型・古層・執拗低音、思想史方法論についての私の歩み」（加藤周一・木下順二・丸山眞男・武田清子『日本文化のかくれ形』岩波書店、岩波現代文庫、2004年136-148頁）。
- (9) 加藤周一『日本文学史序説、上』（筑摩書房、ちくま学芸文庫、1999年）45頁。
- (10) 「戦後日本資本主義の『基本構成』分析試論、欧米類型からアジア類型（日本・アジア NICs・中国）としての再定義」（『国際学研究』明治学院大学紀要、第32号、2007年12月、35頁）。
- (11) 山田盛太郎「農地改革の歴史的意義、問題総括への一試論」（『山田盛太郎著作集、第4巻』岩波書店、1984

- 年, 5 頁)。
- (12) 前掲著, 5 頁。および山田盛太郎「近世日本農業史改革史論」(『山田盛太郎著作集, 別巻』岩波書店, 1985 年, 14-25 頁)。引用者(涌井)が理解の便宜のために表中に加筆した部分がある。特に「5 農地改革」以降の記述は原文にはなく, 加筆した箇所である。
- (13) 加藤, 前掲『日本文学史序説, 上』48-49 頁。
- (14) 加藤, 前掲著, 128-129 頁。
- (15) 加藤, 前掲著, 129 頁。
- (16) 加藤, 前掲著, 406 頁。
- (17) 加藤, 前掲著, 407 頁。
- (18) 加藤周一『日本文学史序説, 下』(筑摩書房, ちくま学芸文庫, 1999 年) 148 頁。
- (19) 「人間は, 彼らの生活の社会的生産において, 一定の, 必然的な, 彼らの意志から独立した諸関係に, すなわち, 彼らの物質的, 生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は, 社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり, その上に一つの法律のおよび政治的上部構造がそびえ立ち, そしてそれに一定の社会的諸意識形態が対応する物質的生活の生産様式が, 社会的, 政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく, 彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的諸力は, その発展のある段階で, それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と, あるいはその法律的表现にすぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は, 生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる」。カール＝マルクス「経済学批判序言」(大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集, 第 13 巻』大月書店, 1964 年, 邦訳 6 頁)。
- (20) 加藤, 前掲『日本文学史序説, 下』, 148 頁
- (21) 加藤, 前掲著, 532-533 頁。なお「当為」とは「あること」(存在) および「あらざるをえないこと」(自然必然性) に対して, 人間の理想として「まさになすべきこと」「まさにあるべきこと」を意味する, といわれている。
- (22) 加藤, 前掲『日本文学史序説, 上』45 頁。
- (23) 武田清子「まえがき, 日本文化のかくれた形」(加藤周一・木下順二・丸山真男・武田清子『日本文化のかくれた形』岩波書店, 岩波現代文庫, 2004 年, 12 頁)。
- (24) 加藤, 前掲『日本文学史序説, 下』532 頁。
- (25) 丸山真男「原型・古層・執拗低音, 思想史方法論についての私の歩み」(加藤周一・木下順二・丸山真男・武田清子『日本文化のかくれた形』岩波書店, 岩波現代文庫, 2004 年, 87-151 頁)。
- (26) 丸山, 前掲著, 95-96 頁。
- (27) 1 ~ 5 の数値記号は山田の時期区分との対応を示す。
- (28) 丸山真男「原型・古層・執拗低音, 思想史方法論についての私の歩み」(加藤周一・木下順二・丸山真男・武田清子『日本文化のかくれた形』岩波書店, 岩波現代文庫, 2004 年 110 頁)。
- (29) 丸山, 前掲著, 106 頁。
- (30) 丸山, 前掲著, 106-107 頁。
- (31) 丸山, 前掲著, 149 頁。
- (32) 丸山, 前掲著, 147 頁。
- (33) 関根敏子「オスティナート」(『スーパーニッポニカ 2002DVD 版』小学館, 2002 年)。なお「パッソ・オスティナート」には丸山もいうように定訳がないようである。
- (34) 丸山, 前掲著, 138 頁。
- (35) 丸山, 前掲著, 116 頁。
- (36) 「口減らしのために, 信州のキカヤ(製糸工場)へ行く飛騨の娘たちの群れが渡り鳥のように来る年も来る年も野麦峠を越えて来た。病気になるまで帰されるみねはこの峠で『あゝ, 飛騨が見える・・・』とつぶやきながら息を引きとった。」山本茂実『あゝ野麦峠, ある製糸女工哀史』(角川書店・角川文庫, 1997 年) 42 頁。
- (37) 山田盛太郎『日本資本主義分析』(岩波書店・岩波文庫白 148-1, 1977 年) 235 頁。
- (38) 山田, 前掲著, 89 頁。
- (39) 「近代社会が遠くの西洋で行きづまろうと, 行きづまると, 日本は近代社会ではない, そんなことを心配するのは場ちがいではないですか。六八年の革命(明治維新のこと——筆者)はフランス革命ではなかった。この国の小作料は, おどろくなかれ, まだ物納なんですよ, しかもそれが収穫の半分以上だ。一体どこに《近代的》な土地制度がありますか。労働人口の過半数が農村に集中している国で, 封建的土地所有と零細農民の収奪を保存しながら, 《近代》を語るのは無意味だと思う。いわんや《近代》を超えるの超えないのという議論は, 滑稽そのものですね。・・・零細農民が封建的搾取のもとで窮乏化し, 低賃金労働力の供給源となる。それを足場にして膨張した日本資本主義にとって国内市場の狭いのは, 当然ですね《大東亜共栄圏》というのは要するに, その帰結としての大陸膨張ということにすぎない。加藤周一『羊の歌』(岩波書店, 岩波新書, 1968 年) 157 頁。寺出道雄は『山田盛太郎, マルクス主義者の知られざる世界』(日本経済評論社, 2008 年)の中で, この箇所を引き「近代の超克」を主張する小説の大家・横光利一を面罵する二十歳そこそこの一高生についてふれている。山田盛太郎『日本資本主義分析』を読みとおした自信がそれを可能にしたに違いない, と。
- (40) 山田, 前掲, 『日本資本主義分析』171 頁。
- (41) 山田, 前掲著, 171 頁。【 】と語句は引用者。
- (42) 山田, 前掲著, 195 頁。
- (43) 山田, 前掲著, 107 頁。
- (44) 山田, 前掲著, 78 頁。

- (45) 山田, 前掲著, 109 頁。
- (46) 山田, 前掲著, 198-199 頁。【 】と語句は引用者。
- (47) 山田, 前掲著, 201 頁。
- (48) 南克巳「解説」山田, 前掲, 『日本資本主義分析』279-280 頁。
- (49) 注 35 で引用した次の文言。「フランス革命ですと、直接耕作者（日本でいえば小作人）に土地の所有権を与え、貴族の土地は無償没収です。これが『古典的』なブルジョワ革命になるわけです。ところが日本の場合、小作人の小作料は江戸時代の五公五民に近い高額が保証され」た。
- (50) 山田盛太郎「農地改革の意義」（『山田盛太郎著作集, 第 3 巻』岩波書店, 1984 年, 180-181 頁）。
- (51) 1934 昭和 9 年 10 月 26 日付け「秋田魁新聞」は、昭和恐慌とあいつぐ凶作で被害を受けた村の実態を「凶作地帯をゆく・空を飛ぶ小鳥類の影をさえ見えぬ」と題する現地レポートを掲載した。「秋晴れの鳥海は清らかな山姿を、紺碧の空にクッキリ浮かせている。しかし、山裾にある町村は、未曾有の凶作に悩み、木の実・草の根、人間の食べられるものは全部刈り取り掘り尽くし、米の一粒だに咽喉を通すことのできぬ飢餓地獄にのたうつ惨状、秋田県由利郡直根村百宅部落のごときは、空飛ぶ鳥類さえ斃死したかと思われ、400 名の部落民からは生色がほとんど奪われ、天に号泣し地に哀訴の術も空しく飢え迫る日を待つみの状態である。・・・凶作が決定的となった昭和 9 年、県保安課がまとめた娘の身売りの実態によると『父母を兄弟を飢餓線より救うべく、悲しい犠牲となって他国に嫁ぐ悲しき彼女たち』の数は、1 万 1182 人、前年の 4417 人に比べて実に 2.7 倍にも増加している。身売り娘が多かったのは、秋田の米どころと言われる雄勝・平鹿・仙北三郡であった」。この困窮はたしかに直接の原因は「冷害」による「凶作」であるが、元凶は第 1 次大戦後恐慌の後の輸出急落による繭価下落からはじまる養蚕・織物・製糸・紡績破綻による農村危機である。しかしこの無残な農村の現実をよそに、1920 年代震災復興の都市改造によって、「帝都」に建造される帝国ホテル（1922 年）・丸ビル（1923 年）などの高層ビル、松竹キネマ（1920 年）・東宝（1923 年）などの映画会社の設立、ラジオ放送開始（1925 年）を見た「モボ・モガ」とよばれた「都市のモダニストたちは、大震災から復興の進んだ 1920 年代末の末には、自分たちがアメリカやヨーロッパの人々と同じ生活をしていると感じていた」。(寺出, 前掲著, 128 頁)。
- (52) 加藤, 前掲『日本文学史序説, 下』504 頁。
- (53) 山田盛太郎「農地改革の歴史的意義」（『山田盛太郎著作集, 第 4 巻』岩波書店, 1984 年, 3 頁）。
- (54) 山田盛太郎「農地改革の意義」（『山田盛太郎著作集, 第 3 巻』岩波書店, 1984 年, 182-183 頁）。
- (55) この方法論・視角にたって書かれた拙稿「戦後日本資本主義の『基本構成』分析試論, 欧米類型からアジア類型（日本・アジア NICs・中国）としての再定義」

（明治学院大学『国際学研究』第 32 号, 2007 年 12 月）とりわけ「基本構成・蓄積メカニズムの核としての【土地所有】を参照されたい。